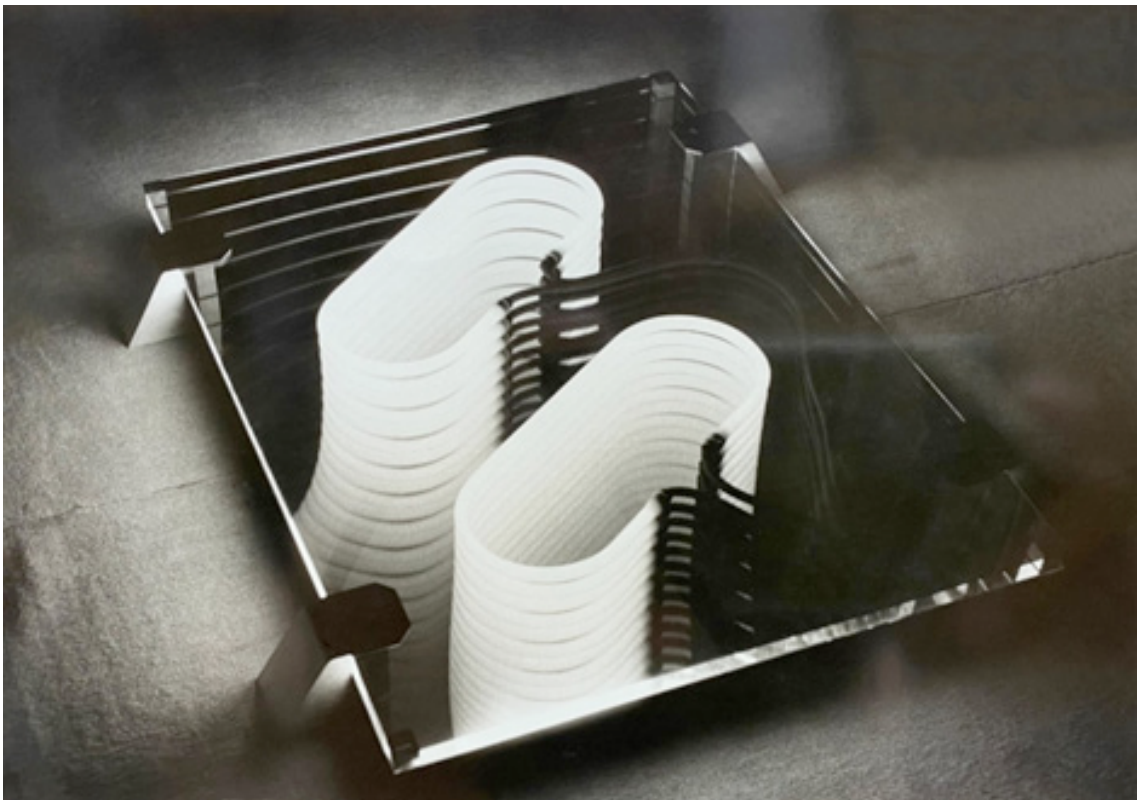


『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 谷 浩二

大学卒業の1977年、卒制作品に日の目を見せてやりたいと思い、新制作のスペースデザインを見つけて初めて応募しました。結果は運よく入選して賞まで貰え、会社勤めの身としては、もうこれで思い残すことなく切り替えていける、と思いました。ところが会員の森史夫さんから、3月頃に松坂屋で受賞作家展があるから準備しといてね、とさらっと言われ、「はぁ…、はい」と返事はしたものの、内心「え～そんなん知らんがな！ほんまかいな？えらいこっちゃどないしょ～！？」と不安感に襲われ、お先真っ暗に……。と、ここまでが前置きです。

<作品 1> 第41回新制作協会展受賞作家展の作品 (1978年)



題名：LIGHTING PASSAGE

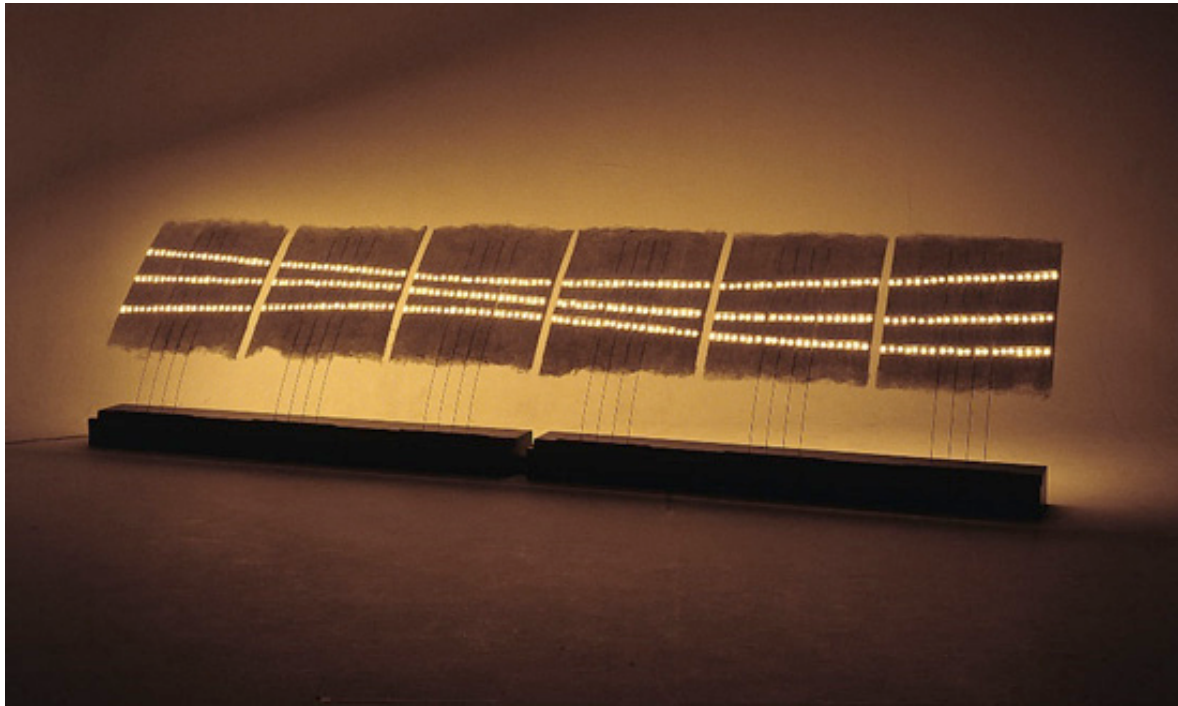
素材：アクリルミラー、ハーフミラー、アルミニウム、スリムライン蛍光灯ランプ

大きさ：W1200×D1100×H137

受賞作家展か……。しばらくして気持ちが落ち着くと少しずつ構想も浮かんできました。しかし、工房はないし東池袋のアパートでは作れない。できるのは図面を渡してパーツを作ってもらうことくらい。これしかない。そこで、電車で行ける日暮里界隈で土曜日も稼働している町工場を電話帳で探し、図面を持って回ったのです。2ヶ月目でやっと見つけた板金屋さんが、その後何年もお世話になる社長の工場でした。「ロットは？」「いえ……。1組だけです」と他で何回も交わしたお決まりの問答にも、「……。そうか」とだけ。そしておもむろに端材の中からアルミの厚板を引っ張り出し、曲げとTIG溶接の極意を見せられました。唖然としながらも感動。その場で図面を修正しては見せ、何回目かで「預かるわ」と言われたときには全身の力が抜けました。パーツ受け取りの日、「あの時のあなたはなんか切羽詰まってて断り切れなかった」と。この言葉は今でも頭に残っています。スズヒロの社長は技能士としても人情家としてもピカイチでした。その他にもスリムラインの大亜蛍光工業さん、アクリルの富士特殊硝子さんも無理を承知で若僧に協力してくれました。それに勤務先の理解も本当に有難かったです。

お蔭さまで何とか無事に<作品 1>を受賞作家展に出品できた訳ですが、この作品が私を創ってくれたのではなく、この作品作りを担ってくれた人たちが私を創ってくれたのです。とは言えこの作品からも、作る場所も時間もお金もない平社員が創作活動を続けていく作法と楽しみ方を教わりました。この作品で私の人生が変わったと言っても過言ではありません。

<作品 2> 第 64 回新制作展の作品 (2000 年)



題 名：luminous bend

素 材：手漉き和紙（楮）、真鍮棒、ムギ球、銅板、自動調光器

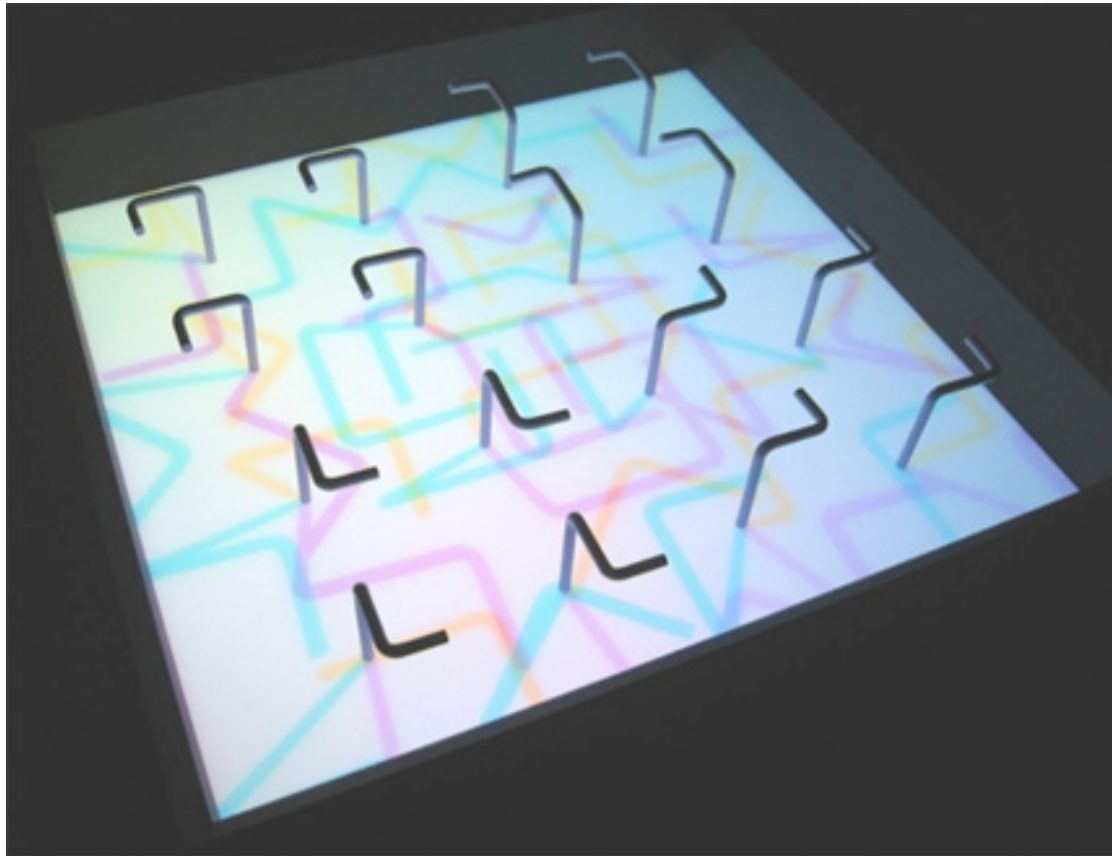
大きさ：W3150×D600×H720

形や素材に拘りはないものの、私が大学のと時から持ち続けているのは《光の持つ表現力を生かす》ことです。そして45回展の頃からは《光源を直接見せない》ことも制作条件に加えました。ぼんやりと静かに光っている状況やその時間の流れに惹かれていて、高い輝度は敬遠しがちだったのです。

<作品 2>では米粒大の白熱電球（ムギ球）60 灯を楮の和紙に直接漉き込んだセードを 6 枚作りました。これは外注できないので、鹿児島にいる友人のアトリエで漉かせてもらいました。上中下の列で 3 回路とし、自動調光器で時間差をつけてのフェードイン、フェードアウト。周期は約 30 秒。風を受けると 6 枚それぞれが揺れて光が曲がり、明暗の変化と共に波が動きます。消えるとムギ球も見えず、ごわごわしたただの紙です。都美館の明るい中で、微動だにせず 1 分（2 周期）近く見ていた人に、結局話し掛けることができず悔やんだことを覚えています。

どんな光源でも長く付き合っていると、時には無理難題を具現化したくなりますが、この作品はそのために最も長い時間考えさせられました。想定した形になったときは、試練をのり越えた気分でした。また、この作品は照明器具ではないにしろ、交流電源を使う工作物として展示するためには、内線規程や電取法（当時）に抵触しない仕様が求められるので、配線や絶縁方法などでいろいろと苦勞を強いられた思い出深い作品でもあります。

<作品 3> 第 78 回新制作展の作品 (2014 年)



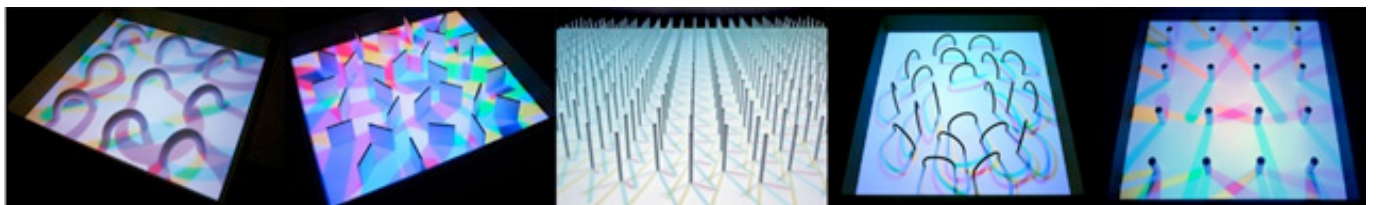
題 名：カゲさんのお蔭 2014

素 材：アクリル、ABS 樹脂、パワー LED、シンクロナスマーター、MDF ボード

大き さ：W590×D590×H820

スペースデザイン部門は応募規定に「空間に関するあらゆるデザイン作品」と謳われており、実験的作品も許容する懐の深さを持っています。私はここに魅力を感じて 43 年間休まず出品してきました。ミラー効果、モアレ、錯視、残像、陰、影、色、時間、空間、など視覚に作用する特徴的な現象や属性を立体造形に反映させてきたのですが、私の制作はどれも試行錯誤の過程に過ぎないものばかりです。これが陳列できる太っ腹な新制作に感謝です。

<作品 3>も試作的に制作したもので、「影の薄いカゲたちに脚光を浴びせて主役に抜擢しよう」とした実験デザインです。そのため派手な色を使うようになりましたが、進化した LED の加法混色で無数の光色が得られるようになると、今度は抛り所や決め手が希薄になり、答のない世界に迷い込んでしまいます。ただこれはこれでその都度新しい発見もあり、面白くて飽きないため、ついつい何年も続けてきました。



そして観察に没頭するあまり、直視してはいけないパワー LED を数秒単位でも回数が増えて結果的には長時間見てしまっているのです。いつの間にか視力は衰え、眩しさにも弱くなり、色名の付く目の疾患が、頼んでもいないのにじんわりと寄り添ってきます。しかし、こんな私を創ってくれた作品を作ったのも私ですから、これは正に自業自得というか因果応報。かと言って今更ヒカリモンとの付き合いは止められず、ならば、素朴な白熱発光に戻るか、しばらく真面目に眼を休めるか、大団円を考えるか、等々、今は選択肢を探しているところです。私にとって 44 回目となる今年度は苦渋の決断で初の不出品ですが、次の新制作展にはまた出せれば良いなと思っています。



- 1952 大阪府生まれ
- 1977 武蔵野美術大学 工芸工業デザイン科卒業
第 41 回新制作協会展 新作家賞 (' 78 第 42 回展同受賞)
- 1978 第 12 回日本国際美術展
第 1 回エンバ賞美術展 (' 80 第 2 回展)
- 1979 第 14 回現代日本美術展
- 1980 第 44 回新制作協会展 会員推挙
- 1982 あかりを考える 4 人展
- 1984 第 1 回 SD 展 (' 85 第 2 回展、' 86 第 3 回展)
- 1987 光・時・スペース展 (藤本経子氏、小野かおる氏との三人展)
- 1988 第 2 回ギャラリーウィンドウ展
- 1993 第 1 回 HUMAN NETWORK 展 (' 94 第 2 回展)
- 1996 「場」展 (山下勘太郎氏、他)
アートの中のあかり展
- 1997 現代美術空間 ART LIVE ' 97
- 1999 第 17 回む展
- 2001 「光と織」(佐伯和子氏との二人展)
- 2002 「3 人の触覚」(岩間弘氏、佐伯和子氏との三人展)
- 2003 あかりメッセージ 2002、同 2003 ('04 同 2004、'05 同 2005、'08 同 10 周年記念展)
- 2006 「時と遊ぶ」(小野行雄氏、金子稜威雄氏との三人展)
- 2008 空間の彩展
- 2012 新制作協会スペースデザイン部有志山形展
公募団体ベストセレクション美術 2012
- 2021 ちょっと小さなスペースデザイン展

谷照明設計事務所主宰
照明士 (SLC1191)
武蔵野美術大学特別講師
照明学会専門会員
新制作協会会員
日本おもちゃ病院協会会員